

ひびきあい

vol.59

発行責任者：岡村斉能
編集：全シ連広報委員会

〒270-1121 我孫子市中峰1604-94
TEL/FAX 0471-88-3322

e-mail : info@npo-jse.org <http://npo-jse.org/>

多様化する高齢者の音楽的態度

丸林実千代（日本女子大学）

私が研究のために、アマチュアの音楽活動者の方々と交流を持ち始めてから20年以上が経ちました。開始当初は、学校音楽教育にはない自由な雰囲気に魅かれ、個々人の音楽に対する熱意に感心し、出会う方々との対話すべてが私には新鮮でした。そしてアマチュアの音楽活動者の方々のこのような音楽的態度が、どのように形成されてきたのかという点が私の研究関心の1つとなり、そこから派生する事柄について具体的に検討・考察することが、私の音楽教育研究のスタイルとなっています。



さて、「人間が音を聞くということ」という事象について、様々な分野からの見解があります。当然のことながら人間は、聴覚という器官を通じて音を知覚・認知しています。しかしその一方で、人間は「主観」で音を聴いているという説もあります。つまりこれは、個々人がそれまでの人生経験を背景として、その経験とすり合わせながら音を聞き解釈しているという考え方です。そして私は、これまでに出会った複数の音楽活動者との対話の中でこの考え方を実感させられ、さらに多くの時間を費やし対話を重ねるたびに私の中で確信ともなっていました。人生経験を背景とするこの音楽解釈の考え方には、人生経験の豊富な高齢者の音楽的態度の理解に重要な意味を持つと思われます。

私は、高齢者の過去の音楽歴を調査し、それと音楽的態度の関連性をライフストーリーの手法を用いて検討するという研究を試みています。高齢者を中心とする多くの音楽団体の方々にご協力いただき、数年ごとに調査を実施し、時系列で追うという縦断的研究に取り組んでいます。以下に、その調査の一端を紹介させていただきます。

例えば、2000年ごろの高齢の音楽活動者は、青年期に戦争を経験した方が多く、貧しい日本の時代を実体験されました。音楽を愛好していたにもかかわらず、日本の経済・文化・社会の状況により、幼少期から成人期まで自由に音楽活動をすることが困難な方が多く見られました。しかし、高齢期となり、やっと自分の時間が持てるようになったとたん、内に秘めていた音楽に対する情熱が一気に溢れ出し、これまでの音楽人生を取り戻すがごとく、音楽に専心している様子がうかがわれました。そして自己の音楽的技能・知識について省察的であり、つねに思慮深く、練習は自己反省との反復の中で展開されていました。そのためでしょうか、音楽指導者に対する尊敬の念を非常に強く持っているという傾向が見られました。

一方、近年の高齢の音楽活動者は、高度経済成長期に青年期を送られた方が多く、さまざまな音楽経験を積まれていました。それは専門的な音楽学習だけではなく、地域やPTA、会社、趣味の団体での活動もあり、さらにはTVをはじめとするメディアを通じての自由で多彩な音楽との触れ合いでもありました。そして高齢期になり、これまでの音楽経験の延長線上で自由に音楽活動を楽しんでいらっしゃる方がほとんどでした。音楽活動に明るく前向きに取り組むとともに、音楽以外の活動にも幅広く興味があり、自己の音楽活動全般を楽観的に軽くとらえる傾向が見受けられました。そして時には他者の音楽について批評的でもあり、音楽指導者に対しても明確な意見を持つ方が多くいらっしゃるようでした。

ここで取り上げた例を表層的に解釈すると、以前の高齢者が音楽活動に真面目で指導者に対して従順であったのに、近年は音楽活動に楽観的で、指導者に対して生意気な高齢者が増えたとなるかもしれません。しかし、過去の人生経験によって現在の音楽的態度が形成されていることを踏まえるならば、近年の高齢者は多様な音楽経験から、自分なりの音楽的価値観や審美眼を形成しているともいえ、以前よりも成熟した音楽活動者になっているとも考えられるのです。

このように時代とともに音楽活動に取り組む高齢者像は変化しています。人間の音楽態度の多様性は、人生経験の豊富な高齢者に顕著に見られます。そして社会の変化の激しい現代において、さらにこの高齢者の音楽的態度の多様化は進むと思われます。全シ連が、この多様化とともに、さらなるご発展をとげられると期待しております。